

幼稚園における外国語（英語）活動の 調査結果報告

長谷川 淳 一

桜美林大学健康福祉学群

Results from a survey of English Activities at Kindergartens

HASEGAWA Junichi

College of Health and Welfare, J. F. Oberlin University

キーワード：早期教育、幼稚園における外国語（英語）活動、小学校英語活動

1. はじめに

現在、2021年度桜美林大学「学内学術研究振興費」の助成を受け、「幼児期における国際理解の一環としての外国語（英語）活動」を研究しているが、幼児期の外国語（英語）活動を考察するに際して、まず幼稚園の実態に焦点を当てることにした。そこで、どれくらいの幼稚園が外国語（英語）活動を導入しているのか、また導入している場合、どのような実践が行われているのか、その現状を調べるためにアンケート調査を実施した。その結果を踏まえて、今後の研究を継続していくことになる。本稿では、研究テーマに関する中間報告として、幼稚園における外国語（英語）活動の現状（導入の有無と時期、位置づけ、導入の理由、指導担当者、指導形態、指導内容、保育者による外国語（英語）活動への関わりの有無、指導教材、指導教具、幼稚園行事との関わり、実施上の課題）についてアンケートの結果を述べる。

2. 調査

2.1 調査の目的

「幼児期における国際理解の一環としての外国語（英語）活動」を研究するための基礎資料を作成するために、幼児期の外国語（英語）活動の実態調査を行い、現状把握をする。

2.2 調査の対象

相模原市内にある全幼稚園 47 園（私立 45 園、市立 2 園）（令和 3 年 4 月 1 日現在）

2.3 調査の方法

郵送法によりアンケートの配布と回収を行った。（実施時期 2021 年 9 月）

2.4 調査の結果

相模原市内の全幼稚園 47 園のうち、30 園から回答を得た。結果の分析をするに際して、回答を得た 30 園の中で、幼児期の外国語（英語）活動を取り入れている 22 園の調査結果を中心に、以下に列挙する。

前述の通り、アンケートに回答した 30 園のうち、外国語（英語）活動を導入している幼稚園は 22 園であった。（図 1 参照）22 園のうちで、外国語（英語）活動を取り入れた時期は、「およそ 10 年前」が一番多く、「35 年前」や「22 年前」といった回答もあった。

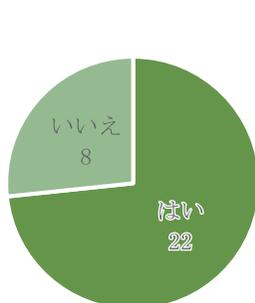


図 1. 外国語（英語）活動を取り入れているか



図 2. 外国語（英語）活動をどのように位置づけているか

図 2 は、外国語（英語）活動を幼稚園の諸活動の中でどのように位置づけているかの回答結果である。ほとんどの幼稚園で、「保育内容の一部」として考えていることがわかる。

表 1 は、外国語（英語）活動を幼稚園の活動に取り入れた理由を複数回答の形式で選んでもらい、頻度順に提示したものである。いろいろな体験、異文化理解や国際化、ことばの楽しさといった観点を重視していることがわかる。「その他」は、園児募集の広報を理由として挙げていた。

表 1. 外国語（英語）活動を幼稚園の活動に取り入れた理由

いろいろな体験をしてもらうため	15
異文化理解や国際化に対応するため	13
日本語以外のことばの楽しさを知ってもらうため	13
幼稚園の保育活動における特色づくりのため	6
将来に向けての英会話の重要性のため	5
幼児教育における幼・小連携の観点から	3
園長先生の個人的体験や幼稚園教育方針のため	3
子どもの自立性、主体性および幅広い人間性を育成するため	2
幼児から英語のコミュニケーション能力を身につけさせるため	2
小学校中・高学年での英語必修化・教科化に対応するため	1
保護者の要望のため	1
その他	2

図3は、外国語（英語）活動の指導担当者に関する結果である。ほとんどの幼稚園では「外部委託の講師が担当」している。「その他」は、主として直接雇用の外国人講師である。

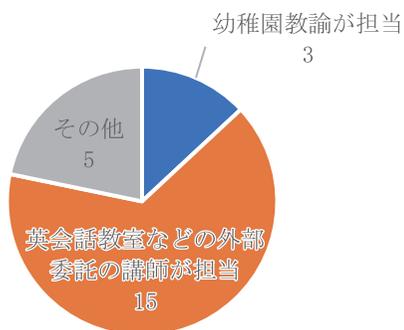


図 3. 外国語（英語）活動の指導担当者

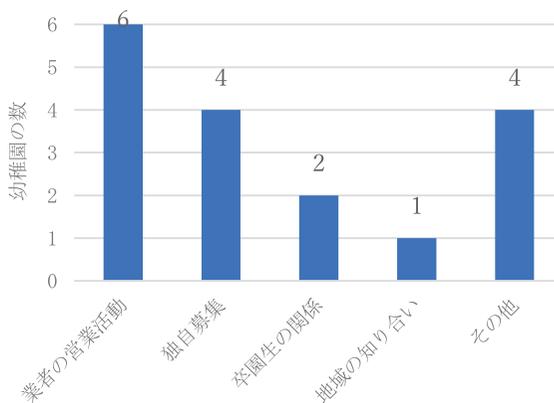


図 4. 委託先の選定方法

委託先の選定方法に関する回答結果は、図4である。「その他」の回答としては、外国人講師に直接依頼するものが主なものであった。委託先を決めた理由は、指導担当者が一定の基準を満たしていたり、幼稚園の教育・保育方針に沿った指導内容であったりすることが、選定の判断をする際の上位を占めていた。他には、料金面や知人の紹介を挙げている。発音面で英語を第1言語とする国の出身者の指導担当者を要望したという回答も見受けられた。

図5は、外国語（英語）活動の頻度を、年少・年中・年長に分類して表したものである。年少では、月1回が一番多いが、年中と年長では週1回が多い結果になっている。全体を通して、年齢が上がるにつれて、週や月あたりの回数が増えていることがわかる。

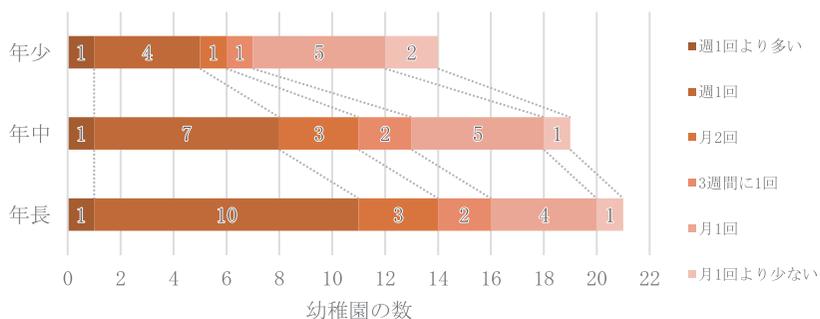


図5. 外国語（英語）活動の頻度

図6は、外国語（英語）活動の活動時間についての回答を10分、15分、20分、30分、40分、45分、50分、60分のように、時間区分ごとに示した。最長の60分を回答した幼稚園も年少・年中・年長を通して見られた。平均的には、30分が多い結果であったが、中には、日本人保育者が1回につき10分程度で週4回、年少の3学期からはそれに加えて、月に1回20分間の外国人指導担当者の時間を設定し、外国語（英語）に慣れ親しませている幼稚園も見られた。

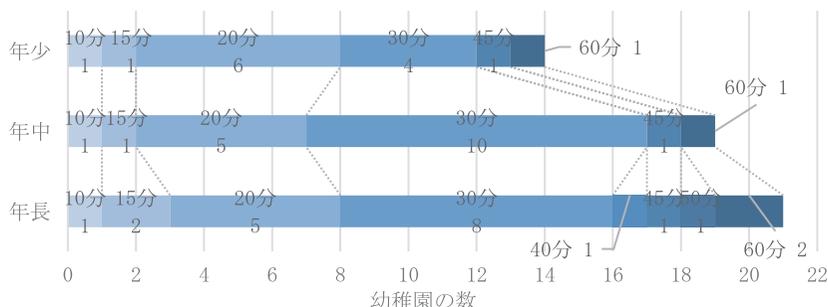


図6. 外国語（英語）活動の活動時間

図7は、外国語（英語）活動の1クラスの人数の集計結果である。年少では、比較的少

人数のクラスの幼稚園が多いが、学齢が上がるにつれて、1クラスの人数が増える傾向が見られる。これは、外国語（英語）活動に参加する園児が増加したこと、また前述の通り、外国語（英語）活動の頻度が高くなったことなどが要因として考えられる。

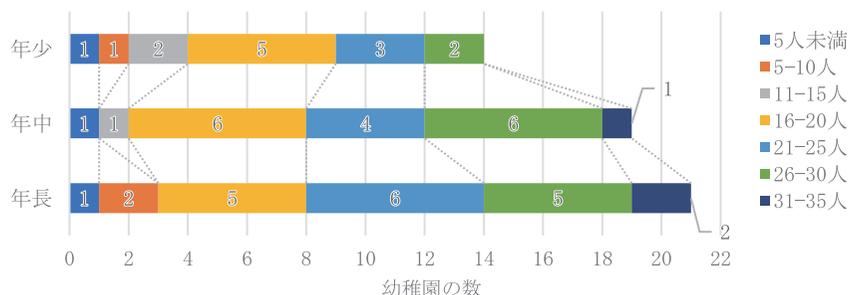


図7. 外国語（英語）活動の1クラスの人数

図8は、外国語（英語）活動の指導担当者の種別を示したものである。年少においては、日本人指導担当者と外国人指導担当者はほぼ同数であるが、年中・年長になるに従って、外国人指導担当者が微増している。言語面だけでなく、異文化理解的側面も考慮しての結果と考えられる。

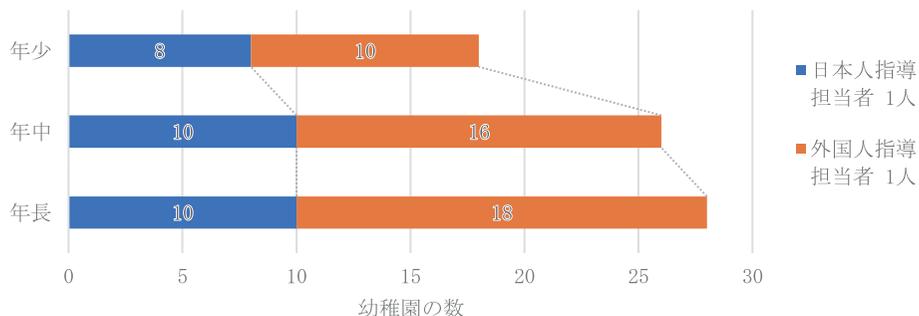


図8. 外国語（英語）活動の指導担当者の種別

図9は、外国人指導担当者の出身国を提示している。英語を第1言語とする国々の出身者が中心であるが、「その他」として、フィリピン、スペインの出身者も挙げられていた。英語を第1言語とする国々の出身者が多いという状況は、幼稚園からの要望か、委託先の雇用関係のためか、あるいはその他の要因からか、判断に迷うところである。

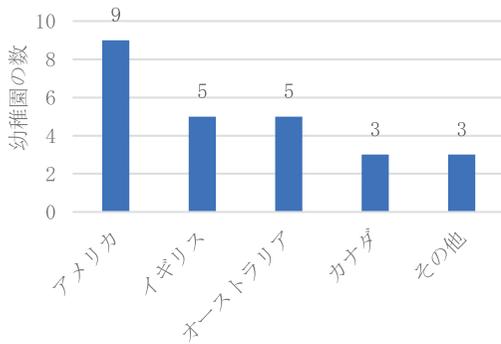


図9. 外国人指導担当者の出身国

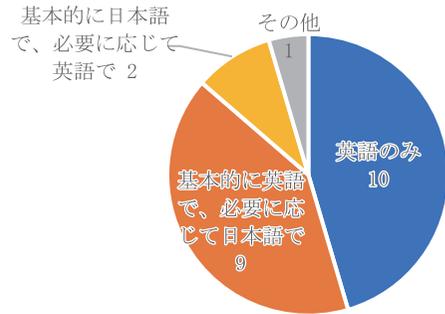


図10. 外国語(英語)活動の使用言語

図10は、外国語(英語)活動における使用言語を表している。基本的に英語で活動が行われているが、必要に応じて日本語を使用することを含めると、圧倒的に多くの幼稚園が英語使用が中心の外国語(英語)活動を行っていることになる。「その他」は、英語使用と日本語使用の割合がほぼ半分の幼稚園である。

TT(ティーム・ティーチング)を実施している幼稚園の数は、全学齢を通して、さほど多くはなく、単独指導が主流と言える。

外国語(英語)活動の指導内容に関しては、「歌やチャンツを歌う」「英語で簡単なあいさつをする」「ゲームをする」が上位を占めていた。その他に、身近なもの(天気・食べ物・動物・色・数など)を聞いたり、発音したりするなどの活動が主なものであった。

指導内容の決定に関しては、幼稚園の責任者が外部委託の指導担当者と相談の上決めるという回答が多く、次に外部委託の指導担当者が決めているという回答が続いた。

図11は、保育者による外国語(英語)活動への関わりの有無を表しているが、無回答の5つの幼稚園を除くと、何らかの形で関わっていると回答している幼稚園の方が若干多い。程度の差はあるものの、関わっていると回答した幼稚園の保育者は、園児と一緒に活動したり、活動のアシスタントとして補助をしているなどの記述があった。関わっていない幼稚園は、外国語(英語)活動を保育外活動(課外活動)と捉えていることも考えられる。

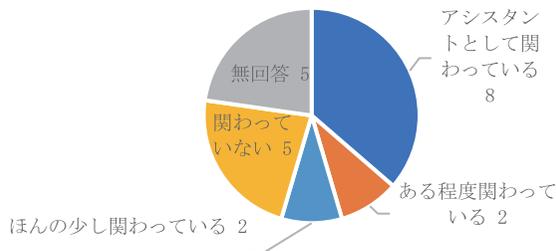


図11. 保育者は外国語(英語)活動に関わっているか

表2は、保育者が外国語（英語）活動に関わっている場合の留意点についての回答を提示している。ことばの楽しさや幼稚園の教育・保育方針、異文化理解や国際化といった視点を重視していることが窺える。「その他」は、無記入であった。

表2. 保育者が外国語（英語）活動に関わっている場合に留意している点

日本語以外のことばの楽しさを知ってもらうための活動内容	14
幼稚園の教育・保育方針に沿った活動内容	8
異文化理解や国際化に対応した活動内容	8
英語によるコミュニケーション能力の育成を目指した活動内容	5
その他	2

図12は、外国語（英語）活動の教材の種別を表している。指導担当者及び所属する会社の独自教材を活用している回答が多いが、教材活用をしないという回答もある。「その他」は、市販教材が具体例として挙げられていた。

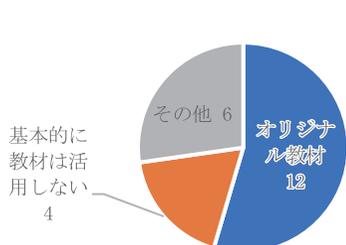


図12. 外国語（英語）活動の教材の種別

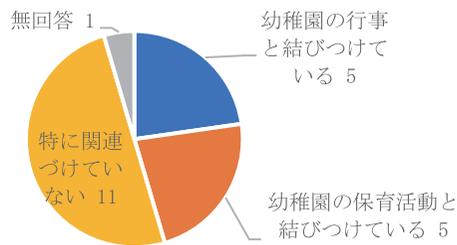


図13. 外国語（英語）活動を幼稚園での行事に関連づけているか

図13は、外国語（英語）活動と幼稚園の行事との関連性に関する回答結果である。行事ではなく、日々の保育活動と関連づけているという回答もあった。行事を含めて、広く保育活動に関連づけているという観点からすると、関連性の有無に関しては、ほぼ同数といえるだろう。

表3は、外国語（英語）活動の教具の種別を表している。カード類や音声CDが主流であるが、絵本やゲーム・パズル、ポスター・写真・イラストなども比較的活用されている。

表3. 外国語（英語）活動の教具の種別

カード類	20
音声 CD	13
絵本	8
ゲーム・パズル	8
ポスター・写真・イラスト	7
映像 DVD やブルーレイディスク	3
実物教具	3
紙芝居	1

表4は、外国語（英語）活動を実施している中で見えてきた課題をまとめたものである。「幼稚園の教育・保育方針との整合性」「外国語（英語）活動における教育的効果」が筆頭に挙げられていた。「その他」には、他の保育活動との調整、外国人指導担当者の雇用、指導担当者の資格、募集しても外国語（英語）活動に参加する園児が少数などが挙げられていた。

表4. 外国語（英語）活動を実施する中での幼稚園にとっての課題

幼稚園の教育・保育方針との整合性について	7
外国語（英語）活動における教育的効果	7
外国語（英語）活動の方向性	3
保育者の外国語（英語）活動における知識や情報	3
金銭面	3
その他	4

3. 調査結果のまとめ

本調査の目的は、「幼児期における国際理解の一環としての外国語（英語）活動」を研究する手立てとしての基礎資料を作成するために、幼児期の外国語（英語）活動の実態調査を通じて、幼稚園における外国語（英語）活動の現状（導入の有無と時期、位置づけ、

導入の理由、指導担当者、指導形態、指導内容、保育者による外国語（英語）活動への関わりの有無、指導教材、指導教具、幼稚園行事との関わり、実施上の課題）を探ることであった。以下に、幼児期の外国語（英語）活動を取り入れている22園の調査結果をまとめる。

<幼稚園における外国語（英語）活動の現状>

- ・導入の有無と時期は、回答のあった30園のうちの22園が導入しており、導入時期はおよそ10年前が最多で、35年前や22年前といった回答もあった。
- ・ほとんどの幼稚園で、外国語（英語）活動を「保育内容の一部」として、位置づけていた。
- ・導入の理由は様々であったが、特にいろいろな体験、異文化理解や国際化、ことばの楽しさといった観点を重視する回答が多かった。
- ・指導担当者については、大部分が「英会話教室などの外部委託」の講師である。幼稚園教諭や幼稚園が直接雇用している外国人講師も少数ながら担当していることがわかった。指導担当者の採用に当たっては、指導の質や幼稚園の教育・保育方針に沿った指導内容が担保されているかどうかを重要視されている。また、発音面で英語を第1言語とする国の出身者を指導担当者として要望する幼稚園もあった。
- ・指導形態については、外国語（英語）活動の頻度、活動時間、1クラスの人数、外国語（英語）活動の指導担当者の種別、外国人指導担当者の出身国、使用言語、TT（ティーム・ティーチング）実施の有無の観点から述べる。外国語（英語）活動の頻度は、学齢が上がるにつれて、週や月あたりの回数が増えていた。活動時間は、年少は、20分、年中・年長は30分がそれぞれ一番多い結果であった。学齢が上がるにつれて、活動時間も長くなる傾向が見られた。1クラスの人数は、年少では比較的少人数のクラスが多いが、学齢が上がると、1クラスの人数が増えている。外国語（英語）活動の指導担当者の種別は、年少では、日本人指導担当者と外国人指導担当者はほぼ同数であるが、年中・年長になるに従って、外国人指導担当者が微増している。外国人指導担当者の出身国は、英語を第1言語とする国々の出身者が中心であるが、フィリピン、スペインの出身者もいた。使用言語は、基本的に英語であるが、必要に応じて日本語を使用することを含めると、大部分の幼稚園が英語で外国語（英語）活動を行っている。TT（ティーム・ティーチング）に関しては、全学齢を通して、あまり多くはなく、単独指導が主流である。
- ・指導内容は、歌やチャンツを歌ったり、簡単なあいさつをしたり、ゲームをするなどが主なものであり、その他として、身近なもの（天気・食べ物・動物・色・数など）を聞いたり、発音したりする活動が挙げられていた。指導内容を決定することに関しては、幼稚園の責任者が外部委託の指導担当者と相談して決定するという回答が一番多く、次に外部委託の指導担当者が決めるという回答結果であった。
- ・保育者による外国語（英語）活動への関わりの有無については、およそ半数の幼稚園で何らかの形で関わっていると回答している。園児と一緒に活動したり、活動の補助をし

たりするアシスタントの役割を担っているとのことである。保育者が外国語（英語）活動に関わる際には、ことばの楽しさや幼稚園の教育・保育方針、異文化理解や国際化といった視点を重視していると回答している。

- ・指導教材は、指導担当者及び所属する会社の独自教材を活用していることが多い。また、市販教材の具体例が挙げられていた。
- ・指導教具は、カード類や音声 CD が主流であるが、絵本やゲーム・パズル、ポスター・写真・イラストなども活用されている。
- ・外国語（英語）活動と幼稚園行事との関わりについては、行事と結びつけている例は多くはないが、広く日々の保育活動と関連づけていると回答している幼稚園を含めると半数近くあった。
- ・実施上の課題としては、「幼稚園の教育・保育方針との整合性」「外国語（英語）活動における教育的効果」が挙げられていた。また、他の保育活動との調整、外国人指導担当者の雇用、指導担当者の資格、外国語（英語）活動に参加する園児が少数なども課題として挙げられていた。

4. おわりに

調査結果により、幼稚園における外国語（英語）活動の実態が垣間見れた。調査件数が少数のため、その外観を把握したにすぎないという意味で限界はあるが、冒頭に述べた「幼児期における国際理解の一環としての外国語（英語）活動」の研究を進める上で多くの示唆を得ることができた。さらに調査件数を増やすと共に、回答理由の明確化など、より詳細な分析を通して、多くの幼稚園の実態把握に努め、幼児期の外国語（英語）活動を考察する際の指針としたい。

今後は、この調査結果を踏まえて、幼稚園における外国語（英語）活動を国際理解教育の観点から再構築し、幼稚園教諭を目指す養成校の学生だけでなく、現場の先生方にも役立つ内容の資料集を作成し、将来的には教材開発につなげたいと考えている。